

## 第148回国際研修「薬物犯罪者処遇：新たな取組」

国連アジア極東犯罪防止研修所 教官 脇本 雄一郎

それにしても揺れが長い。東京に来てこんなに揺れるのは初めてだ。

東日本大震災の襲ったあの日、私は机の下に背を丸めて潜り込みつつ、いつまでたっても揺れを止めない床面を見つめながら少し不吉な思いを感じていました。

ホコリをかぶりつつ机の下からごそごと這って出て、当時、滞在中であったアフリカ人研修参加者と互いの無事を確認し合った後、彼らの帰国手段確保にばたばたと右往左往することになりましたが、ふと見上げると上司がテレビ画面をずっと静かに見つめているではないですか。何だろう。福島原発？

これはまずいことになった。第148回国際研修、大丈夫だろうか？

不吉な思いは、残念ながらそのまま的中します。延期、辞退、自粛、中止、規模縮小といったネガティブな言葉が、この時期あちらこちらで飛び交っていたのを思い出される方もあるでしょう。国際研修もその例に漏れず、万全を期して準備していたにもかかわらず、スケジュールは片端から崩れてしまいました。実際、この時期、在京の国際学会のうちかなりのものは、キャンセルになったと聞いています。

さて、第148回国際研修は、「薬物依存を有する犯罪者の処遇」を学ぶコースとして企画したものです。薬物濫用は、先進国、発展途上国を問わず始末に困った問題で、犯罪者数の多さのみならず、再犯率の高さからも当局者を悩ませています。このかねて頭を悩ます問題に新しい切り口で取り組んでみようというのが本研修のコンセプトで、認知行動療法、治療共同体、処遇効果検証、エビデンスベースドプログラム、ドラッグコート等の昨今はやりの言葉がキーワードとなっています。

ともあれ、半分泣きつつ、半分は意地になってあちらこちらにお願いした結果、様々な方々の御理解御尽力のおかげをもって、5月11日、無事に研修開講の日を迎えることができました。ふたを開けてみれば、研修参加者については、海外からオブザーバを含めアジア・アフリカ出身10名、国内からは8名というおおむね例年どおりの参加をいただきました。

講師の顔ぶれも当代随一の方々と自負しています。

研修の主要課題に照らし、臨床心理／医学系の先生方、刑事政策／法学系の先生方に加え、法務省にて実務に携わる方々にもお越しいただきました。

研修では、「目で見て分かる」コンテンツを大切にしました。

このため、実際の処遇現場に足を運んで薬物依存の離脱指導風景を見学し、あるいは違法薬物検知検査の模擬実施をしてもらい、さらには薬物乱用防止啓もう活動の体験実習車にも乗り込ませていただきました。

また、薬物依存対策においては、刑事司法の枠組みを超えて、他の公的機関、民間諸団体との連携を図ることも大切です。こうした機関・団体の方々の話を聞かせていただくため、精神科病院、精神保健福祉センター、更生保護施設、民間自助団体等への訪問も日程に組み込みました。

お固いプログラム以外では、地域のボランティアの方々の御協力を得て、お茶会、ホームビジット等を企画したほか、全国矯正展を見学に行き、巨大なホールで展示即売される刑務所作業製品の（ウィンドウ）ショッピングも楽しんでもらいました。

いずれにしても、薬物問題に特化して、およそ1か月の間に集中して専門講義を配置、関連する施設はもれなく見学、しかもかなりの基礎レベルから学習に取り組みますといった方針で、カリキュラムを組みました。

残念であったのは、複数の海外専門家から渡航自粛令等を理由とする来日の辞退があったため、国際色のやや薄い研修になったことです。認知行動療法をメインにすえた最新のプログラム等、先進的な取組を研修参加者に十分に紹介できなかったのが心残りです。

ところで、研修開講後、最初の週末のことです。正に五月晴れのその日、研修参加者有志の発案で浅草寺に詣でました。「ここでおみくじを引いて研修の吉凶を占うがよい」との神頼み的な助言を同僚から受けたのですが、当職としては気弱さが先立っておじけづき、結局おみくじは引けずじまい。この研修、後から振り返って、果たして研修参加者の方々には大吉、吉、凶のいずれであったでしょうか。最終的には天からの御託宣もさることながら、18名の参加者皆様の御判断を仰ぎたいと思っております。

ともあれ、閉講式の日、関連する大使館から思いのほか多数の外交官各位

に御列席いただき、晴れがましい表情の皆さんに所長から修了証が手渡され、無事研修終了となりました。終わり良ければすべてよし。研修運営に御協力をいただいた多数の方々に、この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。